

## ヘブル人への手紙3章「最後まで確信」

### 1A モーセよりすぐれた方 1-6

1B 大祭司イエス 1

2B 神の家を治める方 2-6

### 2A 不信仰な心 7-19

1B 荒野での試み 7-11

2B 互いの励まし 12-15

3B 安息に入れなかった者たち 16-19

## 本文

ヘブル人への手紙3章を開いて下さい。私たちは前回、イエス様が、憐れみ深い、忠実な大祭司であり、人々の試みをよく知っておられ、罪の宥めを成し遂げられたということを話しました。

次もイエス様が、大祭司であることを語られますが、イスラエルの家に仕えていたモーセとイエス様を著者は比べます。今、ユダヤ人の信者にとって、困難があるので、ユダヤ教の中に埋没しようかなと思っている人々に対して、この手紙を書いていることを思い出して下さい。モーセは、ユダヤ教の中では、最も偉大な預言者です。モーセが神に立てられたしもべであり、モーセが語った律法こそ神のことばであり、モーセに聞き従わないといけないと信じていました。福音書を見れば、ユダヤ人の指導者たちは、いかにモーセが語っているということを基本にして、すべてを判断していました。「ヨハ 9:29 神がモーセに語られたということを私たちは知っている。しかし、あの者については、どこから来たのか知らない。」そしてイエス様は、「モーセの座」という言葉を使いました。「マタ 23:2 律法学者たちやパリサイ人たちはモーセの座に着いています。」とされています。

これらは、正しいことです。モーセが神の預言者であり、神のことばをモーセは語っていました。けれども、それだけではないのです。私たちはすでに何を学びましたか？ 終わりの時には、御子によって神が語られました。この方こそが、神の栄光の輝きで、神の本質の完全な現れです。モーセ以上の方であり、モーセは神のしもべですが、主は御子ご自身です。それで、ユダヤ教の中に戻ろうとしようとしたので、御子の中に留まるように強く勧め、また警告しているのです。これは、私たちにもよく起こる霊的危機です。埋没するのです。自分の生活や責任の中に埋もれてしまい、これらの上におられるイエス様を忘れてしまうのです。この方から目を離してしまうのです。

### 1A モーセよりすぐれた方 1-6

1B 大祭司イエス 1

<sup>1</sup> ですから、天の召しにあずかっている聖なる兄弟たち。私たちが告白する、使徒であり大祭司で

あるイエスのことを考えなさい。

私たちのことを、「天の召しにあずかっている」と言っています。地上では、苦しみがあり肉体の痛みさえあります。けれども、自分たちは地上の中にずっと歩んでいるのではなく、天の召しにあずかっているのです。天の神の御座の右におられるイエスのところに召されるのです。

そして、「聖なる」兄弟たちと言っています。イエス様が、私たちをご自身の流された血によって、罪の宥めを成し遂げてくださいました。罪の赦し、清めをしてくださいました。それによって、動物の血であっても清められない、良心の汚れを清めてくださるのです。そのようにして聖なる者としてくださるのです。

そして、イエス様を私たちは「告白」していますね。これは、教会として、している大きな目的ですね。私たちは集まって、イエスを告白しているのです。それから、個々人も、この世において、イエスを告白するのです。世はキリストを憎んでいますから、自分が公にすると、圧迫があります。けれども、それでもこの方が主であることを告白するのです。

そして、イエス様が「使徒」であり、大祭司だと言っています。使徒とは、遣わされた者という意味です。イエス様は、父なる神から遣わされた方です。イエス様がよみがえられた後に、弟子たちに言われました。「ヨハネ 20:21 平安があなたがたにあるように。父がわたしを遣わされたように、わたしもあなたがたを遣わします。」これをもって、今度は使徒たちのことばや働きを通して、イエス・キリストご自身を知ることができます。そして、「大祭司」です。

そして、実は「考えなさい」という言葉が大事なんです。単に、考えるのではなく、よく考えるということです。同じ言葉がルカ 12 章 24 節にも同じ言葉が使われています。「鳥のことをよく考えなさい。種蒔きもせず、刈り入れもせず、納屋も倉もありません。それでも、神は養ってくださいます。あなたがたには、その鳥よりも、どんなに大きな価値があることでしょう。」鳥は、いつも見えますね。でも、よく考えて見なさいとイエス様は言われます。よく考えると、よく養われているわけです。ましてや、私たちはもっとよく養われているということです。

このようにして、イエス様をよく考えるのです。使徒であり、大祭司であるイエス様のことを考えたら、2章に出てきた、押し流されるということがないからです。この方が希望となり、海に大きな流れがあっても、錨となります。今、いろいろな世の流れが激しくなっています。容易に、イエス様への信仰から離れてしまいます。

## 2B 神の家を治める方 2-6

<sup>2</sup> モーセが神の家全体の中で忠実であったのと同様に、イエスはご自分を立てた方に対して忠実

でした。

モーセとイエス様の共通点について、語っています。モーセは、イスラエルという家、つまり共同体に仕えている人でした。イスラエルの民を、エジプトから導き出し、荒野の旅も導き、約束後にまで連れていきました。それは、ただ主に対して言われたことを行っているだけであり、それを忠実と言っています。

同じように、イエス様は、父なる神に立てられて、この方に忠実でした。主は、「確かで真実な方」と呼ばれています(黙示 19:11)。主は、父なる神から聞いたことを語られ、神が行われていることを行われました。ご自分の十字架の死に至るまで忠実でした。

<sup>3</sup> 家よりも、家を建てる人が大いなる栄誉を持つと同じように、イエスはモーセよりも大いなる栄光を受けるにふさわしいとされました。<sup>4</sup> 家はそれぞれだれかが建てるのですが、すべてのものを造られたのは神です。

同じように忠実なモーセとイエス様ですが、しかし、次元が異なることを教えています。それは、家と、家を造られた方との違いです。モーセは、イスラエルの家を治めていました。それも、栄誉ある奉仕です。けれども、イスラエルの家を建てられたのは神ご自身です。この方に忠実なのです。造られた方と、造られたものとは、前者が、はるかに栄誉があるでしょう。だから、イエス様は、モーセよりもすぐれた方なのです。

<sup>5</sup> モーセは、後に語られることを証しするために、神の家全体の中でもべとして忠実でした。

では、モーセが治めていたイスラエルの家は、どういう益があるのか？ということになります。大いにあります。それは「証し」です。モーセが幕屋に入る時には、天の聖所に入られるイエス様を示しています。モーセが教えた神の律法は、キリストご自身の働きが証しされています。イスラエルの民そのものに、神の国の証しがあります。これが、旧約聖書の学びの醍醐味です。イスラエルへの契約や約束、その土地、その生活に、キリストにある神の国の姿が投影されています。

<sup>6</sup> しかしキリストは、御子として神の家を治めることに忠実でした。そして、私たちが神の家です。もし確信と、希望による誇りを持ち続けさえすれば、そうなのです。

キリストご自身が、神の御子、神ご自身としてその家を治めておられます。天から、治めておられます。そして、「私たちが神の家」なのです。ここがすごいことです。天におられる神の御子が治めておられる家なのです。教会は、目に見えない神の家であり、大いなることなのです。目で見たら、みすぼらしいかもしれない。迫害を受けているならなおさらです。けれども、この栄光に希望が

あります。

そして、著者は注意をしています。「もし確信と、希望による誇りを持ち続けさえすれば」ということです。二つのことができていれば、ということです。確信というのは、まだ見ていないけれども、これは確かな事実だとして信じていることです。「11:1 さて、信仰は、望んでいることを保証し、目に見えないものを確信させるものです。」とありますね。私たちは目に見えないものを、見ているようにして生きます。そして「希望による誇り」です。キリストにある希望を誇りにすることです。この方にこそ救いがあると自信を持つことです。この方が戻ってこられると期待することです。

ここで大事なのは、最後までこの確信と希望を持ち続けることです。持っているのではなく、継続する、持ち続けるのです。ここが次の荒野での旅の話につながります。エジプトから出てきたのに、主を信じることを途中で放棄してしまった話です。最後まででは信じなかったのです。

## **2A 不信仰な心 7-19**

### **1B 荒野での試み 7-11**

<sup>7</sup>ですから、聖霊が言われるとおりです。「今日、もし御声を聞いたら、<sup>8</sup>あなたがたの心を頑なにすることはならない。荒野での試みの日に 神に逆らったときのように。

ここから 11 節まで詩篇 95 篇からのことばです。ここの言葉を説き明かすのですが、4 章 11 節まで続きます。

聖霊が言われた、とあります。詩篇の言葉が、聖霊によるもので、神のことばだということです。そして、聖霊が、このみことばを通して、私たちに声をかけておられるということです。御声を聞くのは、今、この時にあなたは御声を聞いているのか？聖霊からの語りかけを聞いているのか？ということになります。

御声を聞くというのは、その時でないといけません。書いてあるものであれば、後で読めばよいとなりますが、聞くのはその時でないといけません。主は、みことばを持っておられますが、それを聖霊によって私たちは聞くのです。

それを聞かないということであれば、心を頑なにさせるということになります。人の心は、生ものようです。神の声を拒むことによって、そこにいわば硬さが残ります。拒めば拒むほど、さらに硬くなっていきます。そしてついに、御声が聞けなくなる、無感覚になってしまうのです。

ここで「荒野での試みの日」とありますね。主が試みられます。主が私たちに試みられる時は、いつも良い意図を持っています。何事も起こらなければ、神を信じているといっても、他のものに頼っ

ていることがあります。他のことにより頼んでいるのと、混じり合っているのです。それで、自分は神を信じているということになっている。それで神は、自分の心がどうであるかを、私たち自身が知るために、試されます。そうして、私たちは、ただ神と、そのみことばだけにより頼むことを学びます。そういうことで、私たちの信仰が清められるのです。

しかし、彼らは主に逆らいました。主は、彼らに良くされました。マナを与え、岩から水を与えられました。その試みの時に、主の真実を学ぶことができました。ところが、その恵みを受けているのに、感謝することもなく、覚えることもなかったのです。

ちょうど、イエス様が水の上を歩く奇蹟について、私たちは、聖書の学びのセミナーで見に行ってきました。そこで、弟子たちがイエス様が水の上を歩かれて、舟に乗られたら、風がやんだのを見て、非常に驚きました。そしてこう書いてあります。「マルコ 6:52 彼らはパンのことを理解せず、その心が頑なになっていたからである。」五千人の給食の奇蹟を見ていたのに、それに対してイエス様のなされたのを見ていなかった、主がこれだけの力を持っておられる方だと気づいていなかったのです。心を鈍くするとは、このように主の恵みがあるのに、それを見ないこと。そして、その試み自体を悪意で捕えて、神は自分たちにひどいことをされると疑うことであります。

<sup>9</sup>あなたがたの先祖はそこでわたしを試み、わたしを試し、四十年の間、わたしのわざを見た。

主が私たちを試みられる時は、それは良いことです。私たちのために益になることを願って、試されます。けれども、彼らが主を試み、試すことは悪い動機で行っていることです。これらの良いわざに対して、恵みに対して目を開かず、かえって悪意に受け取り、それで要求しているのです。主に苦みを抱き、主に怒るのです。これが神を試み、試したことなのです。主従関係が変わっています。あたかも、私たちが主であり、神が私たちのしもべのようにみなすことです。

しかし、四十年の間、主は忍耐され、みわざを示し続けていかれました。ちょうど親を試す子がいて、しかし親はそれでも愛を示し、それで子はずいぶん親の愛に気づくということがあります。それを期待して、主は忍耐の限りを尽くされました。

しかし、彼らが決めてしまったことがあります。それが、カデシュ・バルネアのことです。そこから約束の地です。それで十二部族の中から一人ずつ選び、土地の偵察に行かせました。大きなぶどうの房も見つかり、そこがいかにも、乳と蜜の流れる地であることを知りました。しかし、十二人のうち十人が、そこには巨人が住んでいて、恐ろしいと煽りました。ヨシュアとカレブは、主がともにいるから勝ると言いました。しかし、イスラエルの民は不信に陥り、他のかしらを立てて、エジプトに戻ろうとしました。こうして決めてしまったことによって、主は彼らを荒野でさまよわせるようにして、荒野で死なせるようにされたのです。四十年の荒野の生活です。

<sup>10</sup> だから、わたしはその世代に憤って言った。『彼らは常に心が迷っている。彼らはわたしの道を知らない。』<sup>11</sup> わたしは怒りをもって誓った。『彼らは決して、わたしの安息に入れぬ。』

「その世代」の「世代」というのは、だいたい四十年です。成年の二十歳以上の者たちが、荒野で死ぬようにして、新しい次の世代、二十歳以下とこれから生まれて来る子が、約束の地に入ります。これと同じようなことが、イエス様の時代に起こりました。覚えていますか、主は何度となく、「時代」という言葉を使われ、警告し、ある時は嘆かれました。天のしるしを求めて試したパリサイ人たちに、「悪い、姦淫の時代はしるしを求めます。」と言われました(マタイ 16:4)。そして、高い山に降りて来られたら、悪霊につかれている子がいて、弟子たちが追い出せなかったのを見て、「マタイ 17:17 ああ、不信仰な曲がった時代だ。」と言われました。そして、その約40年後、紀元70年に、ローマがエルサレムを包囲して、神殿を破壊しました。

そして、心が常に迷っていて、道を知らないと言われます。主の教えが、道筋なのに、それに聞き従わないので、いつも道に迷っています。それで、正しい道を歩いたことはありません。

そして、怒りをもって誓われました。誓われたのですから、本当にそうお決めになったのです。それが、安息に入れぬということです。これは、約束の地に入らせないということです。けれども、4章で、もっと詳しい説明があり、この安息とは天に入ることです。

## 2B 互いの励まし 12-15

<sup>12</sup> 兄弟たち。あなたがたのうちに、不信仰な悪い心になって、生ける神から離れる者がないように気をつけなさい。

今、読みました、詩篇 95 篇からの引用の言葉を今の、手紙を受け取っているユダヤ人たちに当てはめています。苦しみや試練を通っているうちに、「不信仰な悪い心」にならないように戒めています。なぜ不信仰が悪い心なのでしょう？ここで言っている不信仰は、「不信」という言葉を使うとその意味合いがはっきりとします。神に対する不信です。主を信じているけれども、罪に迷い込んでしまったという過ちのことではありません。心を痛めて、悔い改めの祈りを献げることではありません。そうではなく、困難や試練を受けて、「イエス様を信じていることでこんなに苦しむなんて、なんなんだ。」と言って、「もういい。普通の生活をしていこう」という、イエスご自身に対する不信であります。

ユダヤ人の場合は、神を信じているとされる神殿礼拝や、その他の掟がありますから、それをやっていたら自分は神とつながっていると自分を偽ることができます。けれども、イエス・キリストにある希望から離れれば、それは死んだ宗教になります。生ける神から離れているのです。

<sup>13</sup>「今日」と言われている間、日々互いに励まし合って、だれも罪に惑わされて頑なにならないようにしなさい。

「今日」と言われているように、次の日があるから、次の週があるから、あるいは次の月があるからといって、他の兄弟たちとの交わりを行っていたら、必ず罪に惑わされます。自分は大丈夫だと思っても、心はイエス様に信頼しながら生きていくというところから、離れていってしまいます。励まし合うことが、常日頃から必要なのです。互いに互いを必要としています。

<sup>14</sup> 私たちはキリストにあずかる者となっているのです。もし最初の確信を終わりまでしっかり保ちさえすれば、です。

私たちが、最後の最後に受け取る恵みは、キリストご自身にあずかることです。主ご自身が戻ってこられて、私たちはこの方に顔を顔を合わせてお会いします。キリストご自身にあずかることが、私たちの生きている目標です。その焦点から外れていますか、それとも保っていますか？

そして、最初の確信を終わりまでしっかり保っていれば、と言っています。キリストにあずかることが初めの確信です。それが与えられていたのに、途中で、罪に惑わされて、自分の生活のほうに焦点が合ってしまうということが起こってしまわないようにと注意しているのです。私たちは、いつも最初のほうに焦点が合わります。だれだれが信じて救われた。そしてバプテスマを受けた。これらはすばらしいことです。何にもまして、喜びです。しかし、初めスタート地点について走り出しても、最後のゴールにたどり着く人たちはどれだけいるのでしょうか？それが、試されています。ジョン・バニヤンという人が書いた「天路歷程」を読むことをお勧めします。信仰者が、天のシオンに行くまでの行程に、どのような誘惑や試練があるのかを鮮やかに描き出しています。

<sup>15</sup>「今日、もし御声を聞くなら、あなたがたの心を頑なにしてはならない。神に逆らったときのよう

に」と言われているとおりです。

このように、詩篇 95 篇は、今のことに当てはまるのだよ、ということです。

### 3B 安息に入れなかった者たち 16-19

<sup>16</sup>では、聞いていながら反抗したのは、だれでしたか。モーセに率いられてエジプトを出た、すべての者たちではありませんか。

ここから警告です。イエスについて聞いていながら、それでユダヤ教の儀式の中に埋没できると考えていたら、果たして滅びずに済むことができるのか？という問いかけです。イスラエルも、エジプトから出てきたのですよ。救われたのですよ、ということなのです。私たちが、以前、信仰告白を

したのだから、バプテスマを受けたのだから、というところに頼っていて、もし今、この時に信仰に生きておらず、離れているのであれば、どうなのですか？ということです。

<sup>17</sup> 神が四十年の間、憤っておられたのは、だれに対してですか。罪を犯して、荒野に屍をさらした者たちに対してではありませんか。

憤っておられたのは、まさにエジプトから救い出された者たちなのです。自分は救われているとして、罪の中に生きていたら、死んでしまうのだよ、ということです。

ここで、では「一度、信じた人も救いを失って、地獄に行ってしまうのですか？」という疑問が出てくると思います。私は、そのことについて、沈黙したいと思います。その質問自体が、ちょっと過ちがあると思うのです。それは、ある方が言っていました、「キリスト教ではなく、天国教、あるいは地獄教になっている。」ということです。つまり、死んだ後の運命ばかりを考えて、今、その天国の前味を味わいながら生きているのか？ということを考えていない。あるいは、地獄から救われることで、これまで犯してきた罪、今の罪について考えていない、ということです。天に入る希望、また永遠の滅びからの救いが、今、生きていることに直接、つながっていなければ、全く意味のない、救いなのです。ですから、私は、この質問に対して口をつぐむのです。その質問自体に、もしや不純な動機がないか？と疑うからです。

<sup>18</sup> また、神がご自分の安息に入らせないと誓われたのは、だれに対してですか。ほかでもない、従わなかった者たちに対してではありませんか。

約束の地に入り、そこでヨシュアたちが戦いましたが、王たちを倒し、イスラエルの子らに相続地を割り当てました。そうしたら、「そして、その地に戦争はやんだ。」とあります(ヨシュア 11:23)。約束の地で、初めて安息を得ることができます。そこには入らせないと神は誓われました。それは、信仰によって神に従わなかった者たちなのです。

<sup>19</sup> このように、彼らが安息に入れなかったのは、不信仰のためであったことが分かります。

結論づけています。安息に入れなかったのは、彼らが不信仰だったためです。かつてのイスラエルにとって、安息は約束の地に住むことでしたが、今の安息は何でしょうか？それは、天における安息であり、また天から御霊によって前もって与えられている、御霊にある安息です。4章で詳しく、見ていきたいと思います。

キリストが成し遂げた御業には、安息があります。この方に留まり、この方が来られるところに確信と希望がなければ、どこに休みを得ることができるでしょうか？